

理論と方法

4

Sociological Theory and Methods Vol.3 No.2 1988

特集 権力現象：権力を維持し、内蔵し、産出する制度

権力の予期理論	宮台真司
権力現象の基底	大澤真幸
非公式権力	西阪 仰
権力と制度の理論	永田えり子
実体としての権力は実在するか	盛山和夫
意思・権利・権力	志田基与師

特集 意味と自己組織性

〈言語情報-内部選択〉型の自己組織性	吉田民人
討論：意味・ルール・自己言及	吉田民人、今田高俊、橋爪大三郎、ほか

論文

理解社会学の理論モデルについて	佐藤俊樹
-----------------	------

研究ノート

ある係数の誕生	海野道郎
---------	------

コミュニケーションズ

私とパソコン・ワープロ	原 純輔
-------------	------

Letters

高坂健次 池周一郎 小林淳一

書評

「つきあい方の科学」「現代の交換理論」「クリフォード・ギアツの経済学」
 「統計処理アドバンスド I」「Vision and Method in Historical Sociology」

討論：意味・ルール・自己言及

発言者(発言順)：吉田民人(東京大学) 今田高俊(東京工業大学) 橋爪大三郎
 宮台真司(東京大学) 田中耕一(芝浦工業大学) 大澤真幸(東京大学) 出口弘
 (福島大学) 山崎敬一(埼玉大学) 庄司興吉(東京大学) 永田えり子(東京女子大
 学) 西阪仰(明治学院大学) 奥山敏雄(筑波大学) 浜日出夫(筑波大学) 浅野智
 彦(東京大学)

意味と機能：今田理論について

吉田民人 人それぞれの学問上の原体験というものがありますが、私の場合、それは情報論と情報進化論であって、それに比べれば、構造=機能主義は付随的なものでした。学生時代にモリスの記号論を教わっていて、その頃、遺伝情報(DNA)の解明が文科系の人間にも伝えられ、大変な衝撃を受けた。そのもつ意味をとことん考えていくというのが生涯の課題になるのではないか、と思われたわけです。さらに、構造=機能主義に関していえば、私の受けた影響はパーソンズではなくて、むしろチェスター・バーナードです。だからこそ、情報とか情報進化の延長上に自己組織という問題を考えるということになった。

さて、今田さんへの質問は次の3点に焦点を当てたい。それは、機能と意味、制御と自省、そして管理と支援です。

まず第1の疑問は、機能概念が限定されすぎていることです。今田さんの場合、目的合理的な、あるいは効率的なものだけが機能と結び付くように考えられており、「意味充実」は機能的要件の中には入っていない。私はこれも機能的要件に入ると思う。従って、今田氏が「意味」と言われるものは、「いままで比較的無視されてきた、そして(今田さんの立場からみて)産業社会の脱構築にとって重要な機能的要件」という風に読むべきではないかと考えます。

次に、今田さんが用いる「意味」概念が非常に多様で、文脈ごとにずれているためなかなか理解しがたい。それを、私の理解の範囲内で整理すると、2系列4タイプに分けられる。一番の問題は、「記号論的に定義された意味」と「機能論的に定義された意味」とが区別されずに使われていることです。すなわち、今田さんが「記述概念」として位置づける「ディファレンスとしての意味」は記号論的な文脈のものであるのに対して、「説明概念」として位置づけられる「リフレクションとしての意味」は機能論的なものになっている。その記号論的な用語法でも、さらに2つあって、一つは貯蔵情報空間ではなく変異情報空間を構成する意味ないし差異です。これを今田氏は「既存の差異体系からの差異化としての意味」とか「ゆらぎとしての意味」とか表現する。「構造・機能・意味」という時の「意味」が実はそれに当たります。この3項セットは、私の用語法でいえば、「貯蔵情報・機能・変異情報」ということになるでしょう。もう一つは、貯蔵情報も変異情報も含めた「情報空間一般」を構成する意味ないし差異です。今田さんが「意味解釈法」という時の「意味」がそれに該当する。氏が「ゆらぎとしての意味」とか「構造・機能・意味」とかいう時の「意味」は、特に既存の差異体系からの差異化を意味するもの、つまり私の

いう変異情報に限定されているわけです。今田さんは、私のいう自己組織の第1フェーズ（初期構造＝機能主義の対象）を自己組織化の概念に含めず、その第4フェーズを強調するわけですから、とうぜん変異情報にウェイトがかかる。こうした変異情報にのみ係わる限定的用法と、記号論的に定義された「意味」一般を意味する「意味解釈法」の「意味」、つまり一般的な用法との明確な区別がないために、難解になっている。要するに、第1系列の「意味」は、「変異情報の記号論的に定義された意味」および「記号論的に定義された意味一般」という2つの記号論的定義に由来する「意味」です。

他方、今田氏は、「意味」という術語を機能論的に定義された「意味」としても用います。この機能論的な用語法でも、さらに2つのものが含まれる。一つは、「意味充実」という時の意味であり、それは「機能一般」ではなく「機能的合理性」とは異なる領域ないし次元に属する一つの「特殊な機能」を指しています。ほんらい「貯蔵情報・機能・変異情報」に対応する「構造・機能・意味」の3項関係一般は、用語法の明示的な区別なしに、「意味充実」という特殊現代的なニュアンスを伴うことになるわけです。いま一つは、氏が「リフレクションとしての意味」という時の意味です。これは、自省的に捉えられたゆらぎの機能一般を指しています。ゆらぎの機能はむろん意味充実の機能を含みますが、それに限られない。「効率」や「機能的合理性」に係わる機能も含まれるわけです。ただし注意してほしいのは、既存の貯蔵情報（今田氏のいう構造）を含む「情報一般」の機能一般ではなく、ゆらぎ、つまり「変異情報」の機能一般なのです。要するに、第2系列の「意味」は、「意味充実の機能」および「変異情報（ゆらぎ）の機能一般」という2つの機能論的定義に由来する「意味」です。

要約すれば、今田氏の「意味」概念は次のような構造になっていると考えられる。つまり、変異情報としての意味／意味解釈法の対象をなす情報一般としての意味／意味充実という領域ないし次元の機能としての意味／変異情報が果たす機能一般としての意味、という4つです。これらは一方、「情報一般・変異情報・貯蔵情報」という記号論的文脈の3概念、そして他方、「機能一般・意味充実機能」という機能論的文脈の2概念、という2系列の概念セットの可能な6つの組合せのうち、次の3組を導入していることになる。すなわち、①情報一般の意味充実機能、②変異情報の機能一般、③変異情報の意味充実機能である。残された3組、すなわち情報一般の機能一般、貯蔵情報の機能一般、および貯蔵情報の意味充実機能は「意味」概念のコンテキストでは取り上げられていない。

したがって、今田氏の「<自省的>機能主義」が従来の「機能主義」と異なるという主張の核心は、報告者の用語体系に翻訳すれば、変異情報（既存の差異体系からの差異化としての意味）の機能（とりわけ産業社会の脱構築という現代的な課題からすれば「意味充実」の機能）を主題化し、既存の構造情報との関連を問う、ということになります。しかしそれは、「意味充実」という特殊な要件領域ないし要件次元の重視はともかく、すでに初発の構造＝機能理論は別として、日本型構造＝機能理論が、その記述的・規範的変動論、すなわち「構造＝機能主義的な計画理論」として定式化してきたことではないだろうか。

次に「ゆらぎ」は「変異」と言われるものとはどう違うのか。また、ゆらぎは系統性をもったものとしてしか考えられていないようであるが、なぜランダムなゆらぎを問題にしないのか。さ

らにゆらぎは新たな秩序形成につながるものもつながらないものもあるが、いずれにしてもそこには何らかの「選択」があるはずである。「ゆらぎ」の採択と「ゆらぎ」の淘汰をどのような枠組みで説明するのか。そもそも「選択規準」という概念を導入するのかどうか。導入するとすれば、そこに「機能的要件」を取り込むのか、取り込まないのか。今田さんは機能的要件を捨てたといわれるが、そうだとすれば選択規準として何を考えておられるのだろうか。それにまた、「機能的要件」と「動機」の関連が誤解されている。

次に、制御と自省について。まず、今田さんの自己組織理論では、第1フェーズがまったく無視されている。確かに「自己維持」という用語で第1フェーズは表わされているが、残りの第2、3、4のフェーズを合わせて「自己組織」と呼んでおられるようです。それなら、「自己維持」と「自己組織」の上位概念を必要とするような枠組みを考えないのか。

また、制御（コントロール）からリフレクションへと言われるが、自己組織性、少なくとも相対1次の自己組織性は、構造概念がある以上すべて「制御」なしには存在しえないはず。そこで次に、「自省」の概念と「高次フィードバック」とは果して違うものなのかどうか。低次のフィードバックは、所与のルールがあって、そのルールから逸脱しているかどうかを見るものですが、高次のフィードバックはそのルールが妥当かどうかを見るものです。これがまさに相対2次の自己組織性の1側面であって、「自省」という概念とロジカルには同型です。「当事者＝他者」視点タイプ、さらに徹底すれば「当事者＝自己」視点タイプの用語体系を採用するか、それとも観察者視点タイプの用語体系を採用するかの相違があるとはいえ、自省といおうと高次フィードバックといおうと、それぞれの用語体系で語られる理論の（論理的）構造自体は、同型でありうるのです。そうした意味で、当事者視点タイプの「自省」と観察者視点タイプの「高次フィードバック」を理論構造のレヴェルで対置することはできないと思う。私の自己組織理論を、徹底して「当事者＝自己」視点に馴染む言葉で表現することは、不可能ではない。誤解を恐れずにいえば、たとえば「実存」といういわゆる「主体的」な概念は、「言語情報－内部選択型の自己組織性」を、「当事者＝自己」視点に馴染むような形で記述したものなのです。「学問的実存」を生き抜きたいと願う私の情念は、観察者視点タイプの用語法で記述すれば、「変異情報－内部選択型の自己組織性」へのコミットメントだということになる。当事者視点そのものと、当事者視点タイプの用語法とを区別してほしい。当事者視点による記述は、観察者視点タイプ、「当事者＝他者」視点タイプ、そして「当事者＝自己」視点タイプの、いずれの用語法でも可能なのです。リフレクションと高次コントロール（ないし高次フィードバック、あるいは広く相対2次の自己組織性）は、当事者視点タイプと観察者視点タイプの用語法の相違を別にすれば、理論的には、ほぼ同一の事態を指しています。

最後に非常に重要な問題ですが、管理と支援を自己組織理論の文脈にどのように位置づけるか。今田氏の議論では支援を促すようなゆらぎ、あるいはゆらぎを促すような支援、という論点に重きがあって、自己組織理論と支援との関係がはっきりしない。それに対して私は、管理と支援とは複合的自己組織の在り様のタイプの違いにすぎないと思う。一例をあげれば、既存の情報を前提にして、できるだけ効率よくやってもらうのが目的であるというような在り方と、情報創発をやり易いように自己組織化をするというような在り方との違いです。したがって、管理と支援と

いう概念を、そうした複合的自己組織性とか、あるいはその制度化というような自己組織理論の枠組みの中で位置づける必要があるのではないか。

今田高俊 吉田先生が基調報告で言われたことは、個々の論点では異論のないところもあるけれども、やはり一番問題だと思うのは、基本的には、僕に言わせるとかなり合理主義的できわめて典型的な機能主義の自己組織性だということです。私はこれに対して、リフレキシブな自己組織性を考えたい。それが自己組織性というパラダイムを出すことの本当の意義だと思う。

社会のフロンティアは何かということを絞ってみることが重要。色々あるけれども、一点に絞るならば「意味充実」の問題にあるといえる。意味学派が告発したのも、言語ゲームの背景もそこにあって、意味の公共性とか社会性をどう捉えるかがこれからの問題だと思うのです。

私の機能概念が狭すぎるという指摘ですが、逆に僕は、吉田先生は拡張し過ぎて無内容になりはしないかと思う。そのように拡張してしまえば、機能という概念はいらないのであって、単に作用といえればいい。また、私は機能と意味とを対置しているつもりはなくて、機能・意味・構造という3つがどうリンクされているかを考えるのが大事であり、機能を越えしかもまだ構造化されていない「意味」の領域を公共的な問題として考えていかなければいけないと思っている。つまり、意味の独自の論理を考えるということです。

意味の概念が錯綜しているという批判も、やはり機能論的に意味をみるからであって、私はきちっと定義している。意味は記述概念が差異で、作用(説明)概念がリフレクションです。ゆらぎとしての意味は、記述レベルでは差異性だけの問題ですが、リフレクションとしての意味は、意味充実、意味の運動体の論理というものを明らかにするための概念です。貯蔵的なものと変異的なものを区別していないと批判されるけれど、今は、意味が貯蔵庫としての構造に転移するメカニズムが一番明らかになっていないところで、それを考えていく必要がある。

自省的機能主義も吉田先生流に翻訳していただきましたが、そこでも「構造機能主義的な計画理論が」とある。私は、計画のようなコントロール思想——コントロールを全面的に否定するわけではないですが——ではうまくいかないところが今重要な問題になっている、ということを書いている。

ゆらぎと変異については、私のいう「ゆらぎ」とは、単なる変異ではなくて、既存の枠組み・発想に収まりきらない、したがって制御もできないようなものをさしている。ランダムなものであれば、かえって制御できるはず。そこでゆらぎの選択(制御)規準というものを単純に認めたら、従来の機能主義になってしまう。そうではなくて、差異が伝統的な差異の体系の中に割り込んで自分の居場所を確保するために闘争する、その闘争し合うところが問題なのです。機能に汚染された意味のメカニズムは僕のねらいではありません。

また、僕が機能要件を捨てたといわれるのには誤解があって、捨てたのではなくて、ただ、説明概念としては使わない、と言っているだけです。

秩序維持と自己組織性とを統一する概念を考えるかどうかというのは言葉の問題であって、秩序維持は新しい差異化がルールおよびコントロールの淘汰にあって排除されてしまうこと、と考えられる。吉田先生の第1フェーズから第4フェーズまでというのも、僕の考える構造・機能・

意味の循環の中ですべて処理できると思うのです。

制御の概念が限定され過ぎているというのは、先ほどの機能の場合と同じです。コントロール概念も広げすぎたら実質的な意味をなさなくなる。それに対して、リフレクションは差異の運動、意味充実をするための作用であり、ただそれを分かりやすくするために、制御平面に写像してリフレキシブなフィードバックと言いました。制御を認めないというのではなくて、今はそれを強調する必要はないだろう、ということです。

管理と支援について言えば、機能にぴったりしたシステム作りはコントロール思想に基づく管理システムの設計で、それはこれまで必要からの解放を達成するためには不可欠なことであったと思うが、今は、むしろ意味の論理に基づいた社会のシステム作りを考えることが重要でしょう。そのための受け皿になるのが支援システムだと考えている。この発想が新しい公共哲学としてどこまで可能かということ、機能と意味を、通俗的に言えば生活世界と社会システムを、どうリンクするかということが、重要だと思っている。

最後に、言語ゲームとの関連について。「いかにして言語ゲームが可能か」という問題はすべてリフレクションという作用で説明できると思う。シンボル性の情報を使えるようになるのは、人間にリフレキシブな能力があるからで、人間の条件とはリフレクションできることだといえるのではないだろうか。

吉田 社会学理論のフロンティアというときに2つの意味があって、一つは社会学理論そのもののフロンティア、もう一つは現代社会をどうするかというときのフロンティアですね。今田さんの場合、両者が不可分に結びついていて、社会学理論の歴史的課題と現代社会の歴史的課題がドッキングしている。しかし、これら2つは区別されないと誤解を与える。つまり、意味充実というのは社会学理論のフロンティアではなくて、現代社会のフロンティアなのです。それに対して、社会学一般理論のフロンティアは、また別にありうるでしょう。

今田 いや、それを分けるという発想がおかしい。現実社会のフロンティアと社会認識のフロンティアと絡みあって出でてきたのが社会学理論のフロンティアではないですかね。

ルールと選択：橋爪理論について

吉田 橋爪さんへの疑問は、要点を列挙する形で提示したい。

①「ルールの出現は決定できない」とする橋爪さんに対して一番聞きたいのは、ルール変動論、私の言葉では相対2次の自己組織性を主題化しないのかということです。

②レヴィ=ストロースの親族構造論は、「一定の諸集団の間で、論理的に生成可能な婚姻規則(共変構造の1例)の全体集合の中から、<各集団間の連帯ならびに各集団への女性の均等配分>という2つの機能的要件(選好構造の1例)を充足しうるようなもの、すなわち限定交換型または一般交換型の婚姻規則が採択される」という説明であると解釈することもできますが、いかなる形の「機能的説明」も橋爪さんは認めないのかどうか。

③構造主義では「全てのルールは列挙できる」と考えるのに対して、言語ゲーム論では「全てのルールは列挙できない」と考えている、と主張される。それでは、それぞれの「主体」概念は当然違ってくるのではないか。この文脈で、橋爪氏は、「主体」概念をまったく不必要なもの

考えられるのかどうか。

④「理解」と「記述・説明」との関係はどう見るのか。「言語の特権的意義」は認めるとしても、「理解」のそれは認められないのではないか。つまり、橋爪さんが「意味（ルール）の理解」と峻別される「事実の認識」は、いかなる意味でも「記述・説明」や「理解」や「解釈」を含まないのか。ただし、これは単なる定義の争いに終る危険もある。

⑤「定性的・定量的変項とその変域なる Universe of Discourse を与えた上で、変項の値を指定する」という「記述形式」をどう評価するのか。橋爪さんはシステム論を全般的に否定するといわれるが、そうなればこうした発想も否定されると思われる。しかし、レヴィ＝ストロースの親族構造論は、こうした「記述形式」を採用しているのではないか。

⑥橋爪さんの立場からは「望ましいルール作り」という規範的あるいは政策科学的な課題、つまり相対2次の規範的な自己組織理論と同型のテーマに取り組むことができるのかどうか。

⑦現実の「ルール集合」は、実現可能な、あるいは構想可能な「ルール集合」族の中の一つではないが、ここで「選択」および「選択規準」の概念を導入しないのか。機能的要件の概念を排除するというとき、選択規準の概念一般までを排除するのかどうか。複数の言語ゲームの可能性が実際には一つのものに絞られるのだから、どれになるかということ、選択とか選択規準とかの概念なしに、どうして特定するのか。

以上です。機能的要件は選択規準の特殊ケースであって、数学的にいえば、「（選好）順序関係」というタイプの選択規準です。それ以外にも共変関係というタイプの選択規準がある。変換にもかかわらず維持される構造ということになれば、共変構造も選好構造も同様ですから、その意味では、私のいう自己組織化の制約条件としての共変構造と選好構造は、ブルバキ流の構造概念の特殊ケースになるのではないかと思う。つまり、その限りで、私の自己組織理論は構造主義にもコミットしていると考えています。

橋爪大三郎 まず一般的に言いますと、ルールの変動を説明する仕事があってもいいです。しかしですね、すべてがルールであるという前提に立つ場合には、ルールの出現を説明するルールを主題化しようとして、イロジカルな循環に陥ることになります。だから、それはできないでしょう。

レヴィ＝ストロースの親族の基本構造についての吉田先生の解釈ですが、問題の焦点はそういうことではないと思う。観察可能なのは2つのタイプの婚姻規則であって、六十何通りかの婚姻規則ではない。そんな沢山の婚姻がかつて実在し、そこに選択がかかった、ということは実証できない。構造主義の利点はこうです。父とか母とか、氏族とかのカテゴリーは、機能的な論理からではなく、構造的な原理のなかから生まれた社会的実在である。そして、それまで存在理由のわからなかった婚姻規則やなにかの背後に、それらが組み合わさってできた秩序がある。それを明らかにした。その秩序を、たとえば、女性の配分を公平に実現しているという側面に注目して、一種の機能の実現だと考えたければ、それもよい。ただ一般に機能的説明とは、社会の実現可能性に対する制約みたいなもの（女性を一ヶ所に集めてしまうシステムは子孫の再生産からして実現可能性がないというような制約）であって、そういう制約だけから社会を考えていっても可能

性が多くなりすぎる。実際に観察される社会は少数のタイプに限られ、非常に複雑で微妙なパターンを持っているわけですが、そういう事実にもあった理論構成になかなかならないわけです。

つぎに、「主体」ですが、社会科学では伝統的にこれがあたかも実在するように考えられてきました。しかしそれを元素や素粒子と同様の実在と考えることに、構造主義や言語ゲームは異議を唱えます。主体はむしろ、派生的なものです。構造主義から言えば、主体というのはごく特定のルールにこだわっている特定の視点と対応するものです。また言語ゲーム論では、特定のルール（たとえば近代というある社会の運営方法）の内部で像をむすぶものである、とみえるだろう。

理解と説明に関して。私は理解の特権的意義を強調しているのではない。社会現象に関するある実証的な議論を立てようとする場合に、自然科学と構造上の違いがあるのではないか、ということをおうとしている。なぜかという、自然科学では対象の側に理解という現象が存在しないけれども、社会科学では、対象に、理解という活動が含まれているわけです。そして、たしかにそこに理解が存在していると主張したり、実証したりするのがむずかしい。それをうまく処理するのが社会理論の重要なポイントではないかということを示唆したのです。

5番目の質問ですが、そういう記述形式のような抽象を行なうことは、具体的な理論構成にとって、あまり手助けにならないだろうと思われる。たとえば、「文」を定義する場合、「それは単語を並べたものである」と言うようなもので、それは確かにそうだけでも、抽象的すぎて「文」というものについての深い理解はえられない。もう少し、たとえば「主語と述語があるもの」とかいうようにすると、記述のレベルが上がる。このように、記述の形式を具体的に肉付していくところに、理論の醍醐味があるのだと思う。

望ましいルール作りについて、私の立場からできることは、「望ましいルール作りをするというゲーム」を考え、そのルールを考えることです。

現実のルールの「選択」ということについては、なぜそういう風に考えなければいけないのかと疑問に思う。「選択」を立てるということは、選択を遂行するある主体を背後に想定することです。それをある形で抽象すれば機能要件と呼ばれるものになるかも知れない。しかし、この選択規準というものとルールというものがかりに社会の全体を覆うのだとすれば、その内部にいる人間との関係がどういうふうになっているかを特定化しなければ、この理論は完成しない。この理論を完成しようとする、つまり選択規準を立てる形の理論を形式的に完成させようとする、今田氏が指摘したように、自己準拠型になっているいろいろな問題に逢着する。僕からみると選択規準は立ててもいいし立てなくてもいい。しかし、立てた結果、ものすごい困難が起こるということをおう理解していただきたい。

宮台真司 吉田先生は選択という問題を出されるときに、エルゴード性のようなもの、あるいはランダムな変異を暗黙の前提にされていると思う。ルーマンも選択という概念を用いているが、彼は選択はランダムネスの中から行われるのではないと言う。どういうことかという、意味が地平に対するわれわれの目配りを帰結する——意味概念はわれわれを地平という概念に導くための戦略的な拠点のだが——が故に、選択が行われるときには実際にはランダムではなくて、地平の制限されたパースペクティブを基礎とすることによって選択が生じる。そうした個々の選択はかなり偶有的である、というものです。従ってルーマンの場合、選択といっても、主体が選

択することに力点が置かれるのではなく、社会システムが選択の地平や前提を準備する点が重視されます。

次に、理論の無限定性と普遍性とは区別される必要があると思う。普遍性と言うのは文脈自由ということですが、普遍理論は主題領域を限定することによってかえって可能になる。ところが、どんな主題でもある地図の上に位置づけられるのだという議論は、普遍性ではなく無限定性になる。これは橋爪さんの言われる「抽象水準を落として」という問題と関連している。

吉田 選択の対象になる変異を、私は、「構造内生的変異」と「構造外生的変異」に2分します。前者はメタ構造の制約のもとでの変異、そして後者はメタ構造による制約のないまったくランダムな変異です。また私は、理論を作るときの基本的なものの見方、考え方、とか新しいカテゴリー体系とかを「枠組み」と呼ぶが、宮台氏はそれを「無限定的理論」と言う。確かに、今日の私の話の中で、いくつかのものはそういう意味での枠組みですが、しかし、自己現象の3層理論と称しているものなど、一応理論と呼んでいいものもあると思う。

しかしながら、無限定的なレベルで新しいカテゴリー体系が出るということは、最終的に普遍性をもった文脈自由の本当の理論を作るために、まず必要なことであって、その作業が私の場合、かなりの部分を占めている。新しい命題体系を作る前に、新しい差異化、新しいカテゴリー体系がどうしてもいる。つまり、知の世界のカテゴリー体系そのものの脱構築。そうした新しいカテゴリー体系を抜きにして、本当の意味での新しい理論はできないのではないか。いいかえれば、新しい概念の差異化の試行なくして新しい理論はできないと思う。そういう根底的な意味で、理論の新しさというものを考えているのです。このことを形式的にいえば、①新しい概念体系による既成の命題体系の再構築、②既成の概念体系による新しい命題体系の構築、そして③新しい概念体系による新しい命題体系の構築、という4タイプの理論創造の営みにおいて、私の作業は、③の前半部分に傾斜しているということでしょう。

リフレクションとはなにか

田中耕一 今田先生の言うリフレクションが、吉田先生の相対2次の自己組織性と同じものなのかどうかどうもはっきりしないような気がします。吉田先生の自己組織性はルールに対するメタ・ルールを作るということであって、オブジェクト・レベルとメタ・レベルの区別がはっきりしている。しかし例えば、ルールと行為について考えてみますと、通常われわれは「行為者はルールにしたがって行為している」と考えるのですが、行為者がこのルールを「知る」ということが起こると、行為者はそれを「利用」することが可能になる訳です。簡単な例は、意図的にルールを破るとか、ルールを自分の利害のために利用するということですが、こうなると行為者は厳密な意味で当該の行為に従っているとは言えなくなる。つまりルールというメタ・レベルと行為というオブジェクト・レベルの区別が混乱してしまう訳です。これはある種の自己言及で、行為という場面では必ず生じてしまうのですが、こうしたところは、吉田先生の理論では取り扱えないだろうという気がします。

今田 おっしゃるとおりで、メタレベルで発想したら論点先取になるのです。ルールの上にもまたルールがあって、... というように全部最初から用意しなければ議論が立てられなくなる。

明らかに、私の考える自己組織性はそうではない。私は差異化やゆらぎを通じた自己組織という立場を採っていますが、その場合には偶然性の困難を抱えることとなります。これが最大の問題点で、それに陥らないための装置は何かを考える必要があるのです。

大澤 今のお話だと、リフレクションとはより上位のルールにしたがうことではない。そうすると、リフレクションとは具体的にどういう行為なのでしょう。社会変動期にいろいろなルールが現れる場合、あるルールに立って他のルールを批判するということが起こるが、そういうことは、メタ的なルールに立って批判するという構造と同じですね。これが、今田先生が期待しているような構造になっているかどうか疑問です。

それから吉田先生の自己組織性とは、どういうことか。これは、情報による制御というふうにご考えてもいいですか。そうすると、コンピュータは自己組織系になりますか。

吉田 コンピュータは相対1次の自己組織性しかない。もしも、自分のプログラムについて検討するようになれば、相対2次の自己組織性になってくる。私の場合、今田氏がリフレクションとか自己言及とかいわれるものを、「相対2次の自己組織性」という術語で総括している。「相対2次の自己組織性」を当事者視点タイプの用語でいいかえれば、たとえばその1側面が、「リフレクション」だということになる。

今田 リフレクションというのは確かに分かりにくいので、いつもコントロールと対比させて説明しているが、論理的には自己言及のこと。一例を上げれば、今までの死というものは心臓および頭脳がすべて停止したときと定義されていたが、それでは問題が起きてきて、心臓死と脳死を区別・差異化してそれぞれの問題としてルール化しようとしている。ところがその際、やることが一杯ある。まず、人間の死に対する意味の観念を変えなくてはならない。既存の法体系とコンフリクトを起こさないようにしなければならない。結局、リフレクションというのは差異化によって、いままでルールとして沈黙していたものを一回差異のレベルに解体することです。ルール崩し、コントロール崩しを一回やらないことには、組立て直すことが出来ない。そういう作用がリフレクションだと言える。

結論的に言えば、社会的な意味の論理学が出来るまではリフレクション思想は構築出来ないと思っている。だからそれは課題です。

自己言及のメカニズム

出口 弘 吉田先生の話も今田先生の話も、どうもメカニズムの理論がでてこないという点では同じだと思う。

今田さんが新しい公共哲学という時に、真理の合意説的な立場からやっているハーバーマスに似たところがあるが、スタンスはちがう。

吉田先生の枠組みは非常にきちりとしているが、その論理構成で何ヵ所か気になるところがある。ひとつは、「理解」の部分で、心理学的というかメタ的に処理されてしまっている。また、「論理的包摂」という概念も、分析哲学のコンテキストでも、analytic-synthetic distinctionはどうなるのか、どこで観察される現象と接続するのか、はっきりしない。

今田 ハーバーマスの議論は18世紀的な市民革命の社会理念にとらわれ過ぎていて、モダ

ンは未完成だからもっと努力しなければいけないという発想だと思う。しかし、これではうまくいかない。60年代半ば以降からでてきたのはみんな意味をめぐる議論で、意味学派と称される現象学的社会学、シンボリック・インタラクショニズムやエスノメソドロジーは、意味をどうしてくれるのだと告発したわけでしょう。まだ、できていないけれども。今言えることは、すべて機能的な発想を引き剥して、そして構造論的な思考もいっさい拒否して、それで残ったところは何か、を考えるとことだと思ふ。それが意味の領域なんです。

出口 たとえば、アローの定理とかセンの定理とかフリー・ライダー問題とか、ああいうたぐいの公共哲学ではなくて、しかしそれなりに厳密な公共性の論理学が出来ると確信していると言っているか。

今田 確信しているというよりも、作らなければしょうがない。

宮台 今田先生も、自分で退けている制御理論のくびきの中にいらっしゃるような気がする。ある対象を情報が制御しているという図式はきわめて抽象的で、たとえばサーモスタットでも、サーモスタットで部屋の温度を制御しているという見方と同時に、部屋がサーモスタットを制御しているということも可能です。ただ、この場合には、サーモスタットを人工的に作成して、「部屋の温度を制御する」という目的のためにシステムに導入しているので、二次的な記述として、制御／被制御という関係の導入が可能になっている。しかし社会システムに、情報が何かを制御するという図式を持ち込むときは、問題が生じる。何が何を制御しているかということが自明ではない。田中さんは、今田先生はより循環的な図式を出しておられるのでよろしいのではないかと、いわれたが、それには疑問がある。

反省やリフレクションは誰がするのか。もし、やはり主体がそれをするものであるとすると、実践的な含意は機能理論と大差ないものに落ち着くかも知れない。いずれにしても、リフレクションがどこに帰属するのかが曖昧なままであると、機能理論と意味理論は似てしまわないかという問題が生じる。

田中 今田先生と吉田先生の理論が似てしまうのではないかというのは、僕ももともとそう思っている訳で、ですから逆に似ないためにはどうしたらよいかという風に考えたわけです。その意味で、今田先生の新しい公共哲学の具体的なイメージが分かりません。いままであったルールをこわして再び作るためのメタ・ルールを作りましょうというのと同じに聞こえる。

大澤 ハーバーマスの議論は自己言及ではないですね。たとえば、一般に駄目になったら、特殊なディスコースの場面にいく。そこには明確な原理がある。つまり、ある特殊な原理に遡及してもう一度社会を全体として考えるという構造になっているので、自己言及でもリフレクションでもない。

今田 僕は、ハーバーマスはその点でまさに近代（モダン）の枠の中の人だと思う。リフレクションは創発特性にならないと思うから、最終的にやるのは個々の人間です。それは認めざるをえない。しかし、その受け皿として、公共の場に意味の運動・差異化の運動を出させるための支援システムというものを考える。

宮台 その場合、支援システム的设计者が問題です。支援システムとして妥当であるかないかという評価が何者かによって言明され、あるいはそうした言説が社会に流布する。それは機能

主義者の言説とは区別されるのでしょうか。

今田 機能主義的にやる支援システムもある。また、それとは関係なく、自分たちで勝手に作り上げるものもある。パソコン・ネットワークのように。また、完全に国の補助金をつけて、福祉制度としてやるものもある。

情報コードと言語ゲーム

吉田 論理的包摂と心理的包摂の2分法のヒントは、いまは亡くなられた矢田部達郎先生という京都大学の心理学者が、私が大学生の頃、喉頭ガンを押しての非常に感動的な授業で語られたことから頂戴しています（矢田部達郎『心理学序説』1950年、創元社）。まだ新カント学派の理解と説明は違うというような議論が幅をきかせていたときに、説明と理解、あるいは自然科学と文化科学はそんなに違うものではない、ということ強調された。それに鮮烈な印象を受けたわけです。記述・説明と理解に関する私の議論は、それを基礎にしながら、多少の彫琢をくわえたものです。

論理的という厳密に言えば、対象を日本語で記述する場合のように、論理的といえないものもあるので、用語として問題があるとは思っている。論理という言葉の解釈にもよりますが。

規則の生成・存続・変容の法則を探求するのが相対2次の自己組織理論だといえます。だからこそ、規則のレヴェルで矛盾があっても矛盾がない方向へ規則が変わっていくという法則を出しましょうと言っているわけです。

選択の概念も絶対必要で、パソコン通信を例にとれば、僕は昨年ひと月ほどやみくもにあちこちBBSに電話していたけれどやめてしまった。これは選択持続ではないわけですが、いまやっている人は選択がないのではなくて、選択を持続しているのです。

出口さんのいわれた理解の問題は自己言及的な関係になっている。このグループで今日私が何をやっているかということ、私が観察者の立場で理解とか記述・説明しようとするれば、完全にリフレクシブになっているわけです。そこにある種の特徴が出てくることは否定しない。対象となる情報空間のコードと、対象を包摂する側のコードとが同型だと、そのことの故に、社会科学の独自性が出てくるけれど、それは、理解という概念が物理・化学現象にも妥当するという根本的な側面を、変えることにはならない。

もう一つ、イメージ現象、シンボル現象、言語現象と事前内部選択というのはセットになっていて、われわれ人間はシンボル記号を獲得することによって、他の動物とは異なるタイプの過去と未来と架空の世界を手に入れたわけです。それは画期的なことで、シンボル能力がリフレクションの根底にあるとは思っている。決してその逆ではない。このシンボル能力に、事前選択が絡んでくる。他の動物は試行錯誤でやってみて選んでいるわけだけれど、人間は事前に頭の中での試行錯誤を通じて選択している。そういう、シンボル情報化の能力と、事前選択なる独自の内部選択とのセットが、今田さんのいうリフレクションを可能にする技術的基盤であって、それらすべて「情報学」の文脈で捉えられる、と私はいいたい。

山崎敬一 言語コードの内実が分からない。言語コードと言語ゲームは全然違うと思うが。

吉田 言葉の使い方を約束する2つのルールです。一つは、言葉の意味を約束する意味論的

コード、もう一つは、言葉の並べ方、つまり文章の作り方を約束する統辞論的コードです。

私は、言語コードの共有と言語メッセージの共有を区別しますが、社会学者が社会規範——言語コードも社会規範の1つですが、それを除外して——が共有されているというとき、それは一定の言語メッセージが共有されているということであって、一定の言語コードが共有されているという話ではない。そうすると、言語ゲームというルールとはルールとしての言語メッセージなのかルールとしての言語コードなのか、逆に橋爪さんにお聞きしたい。言語ゲーム論が社会科学の理論として意味をなすとすれば、メッセージ・レベルでのルールでなければならないと思う。

橋爪 分かりやすくお返事すれば、メッセージをやりとりするゲームがある、また、コードのレベルでもそういうゲームがある、ということでもいいです。でもね、コードに関するメッセージをやりとりする、なんて考えてしまうんなら、言語ゲーム論の本質は解りません。まず、コードとメッセージはどのような分解なのだろうか、と考える。意味現象（というか、ある種の記号現象）があって、その意味作用なり指示作用を分解する。そういう機能的分解を施した結果が、コード/メッセージです。いっぽうルールは、これらよりもっと深いレベルに立っている。意味作用をもっているという前提めきに、そういう機能的分解をとげる以前に、人間にだけそなわっている秩序なのです。

庄司興吉 それは、言語で表現されなくても、人類が類として登場したときからある、といっているのですか。それから、なぜそういうものがでてきたかというようなことは、橋爪さんにとっては無意味な質問ですか。

橋爪 言語で表現されなくてもいいですが、私からみるとそういう問題について実証的に考えていくのに大変な問題がある。猿が人間になるプロセスは、明らかに連続的だろうし実在するプロセスだろうと想像できるけれども、実証することが出来ないし、論理的にも構成できない。大脳生理学などが進歩すれば、人間がなぜ言語をしゃべるかに関する完全理論が出現する可能性もあるが、今のところそれがどんなものになるかまったく想像できない。だから今の段階で、実証的に議論する意味はそんなにないだろうと思う。

庄司 自然科学では、生命の発生を実験的に探求するようなこともなされているが。

橋爪 大分、質の違うことだと思う。動物記号論とか記号進化論とかもあるけれども、私の理解ではそういうものはアナロジーからできあがっていて、説明能力がそれほどあるとは思えない。

<メタ>と自己言及

永田えり子 今田さんの自省的機能主義も結局メタの屋上を重ねていくことになりはしないかと思う。どういうことかといえば、社会変動論をやるからには、社会Aから社会Bに移行するメカニズムを理論として与えてやらなければならない。脳死の場合、新しいルールへの移行をリフレクションで説明するといった途端、リフレクションはこれこれのメカニズムをもっていて、それによって今までの死の概念から新しい二つの死の概念がでてきたのだと説明できなければならない。これは、自省の仕方のルールを提出することになる。そうすると、自己組織性を本当に説明できるためには、自省のルールがどういうふうに変更していくのかも説明できなければなら

ない。これは、メタの屋上を重ねていくのと同じではないか。

さらにいえば、メタの屋上ではなぜいけないのか。自己組織とみえるものがあって、形式論理ではうまく定義できないといったときに、自己組織に見える現象を自己組織でないような理論で説明してなぜいけないのか。それである程度うまく説明できたということになれば、社会学の使命はとりあえずいいのであって、もっといい理論がでてくるまで待てばいいのだから。もっといえば、だから、自己組織の理論というものは必要ないのではないか。

今田 メタ化の議論に陥るということだが、僕はメタ化することをやめるためにリフレクションを入れたのであって、構造と意味と機能が循環しあっている限り、すべてそれで処理できるからメタ化の議論に陥らないでも済む。ただ、自省そのもののルールを考える必要があるのではないかという問題は、実はあって、今後の展開で考えていくつもりです。

メタ化の屋上屋でなぜいけないのかという点は、ごもっともで、もし自己組織性の問題を扱うのであれば必要ないでしょう。プラグマティックに妥協することも構わない。実際の数学は、ゲーデルの定理にも関わらず、微分方程式を解いたりするレベルでは困らないのだから。しかし、自己言及の問題は、科学の究極の認識可能性の問題として存在している。

吉田 報告で述べたディスプレイの話、橋爪さんはどう解釈されますか。

橋爪 これは昔から問題になっていた。たとえばタイプライターに鳥が止まってランボーの詩を打つ可能性とか。しかしこのことと、人間だけが理解という行為を営んでいる事実とは別です。理解を心理的に捉えてしまうのでは、どうしようもない。理解は、他者の営む理解を事実認識する、ということでもありますが、それを実証的に論じようとする、非常に困難がつきまってくるということなんです。

西阪 仰 理論がしがっている論理が自己言及している、reflexiveであるということと、理論が扱っている事態がreflexiveであることは違うことで、分ける必要がある。ハーバーマスは、discourse というものはコミュニケーション行為のreflexive formだと言っているわけで、あつかっている対象はreflexiveだけれど、それを扱っている論理の構造は全然自己言及していない。

大澤 しかし、ハーバーマスは実体的に rational な discourse の場面と普通のコミュニケーションの場面とを分けているわけではなくて、一種の規範的あるいは論理的要請として分かれると考えているわけだから、厳密な意味でのself-referenceとは違うものがある。

宮台 メタというものでもないですね。rational discourseとそうでないものが境界設定されて、rational discourseの方がプライオリティがあるという理論だから。

意味と因果論

奥山敏雄 機能とかコントロールとかがよって立つ立場と言うものは、因果的世界観だと思うのです。ゆらぎというのも結局は因果的な文脈でのuncertaintyでしょう。それに対して、意味に注目した途端に、因果は問えなくなる。因果と意味を両方考えたとしたら、一つは、意味解釈の一貫として位置づける一元論が可能だろうと思うが、この点、吉田先生、今田先生ともどう考えておられるのか。

吉田 2つの答え方がありうると思う。一つは、シグナル性の情報で制御されている自己組

織システムとシンボル性の情報で制御されている自己組織システムとがあって、前者はあくまで因果関係のもの。他方、シンボル性の自己組織化では、因果論は、因果論という言葉の解釈にもよるが、適用できない。シンボル情報の登場と因果論の撤退とはトートロジーだと思っている。具体的に言えば、遺伝情報はすべてシグナル情報、感覚運動情報も全部シグナル情報で、これらの遺伝情報型、感覚運動情報型の自己組織システムの場合、少なくともその相対1次の自己組織性については、現に因果論的な説明がなされている。ところが、心像とか言語が登場してシンボル性の自己組織化が可能になった。ここでは、因果論の説明は成り立ちにくい。私は、「因果論的説明」を「システムの共変構造による説明」の1事例と位置づけていますが、シンボル性の情報空間には、非因果論的な共変構造が登場するわけです。

もう一つは、因果論は自己組織性をもたないシステムのもの、自己組織システムになると因果論は基本的に適用できないとする立場もある。しかし、これは私はとらない。

ただ、genetic codeでも「意味」という言葉を使ったりするので、ここで奥山氏のいう「意味」は、シンボル性の意味現象に限定するという理解で使われていると思う。

今田 僕は意味のレベルでは因果性はきかないと思っている。そうでないと差異の運動体ということとは言えなくなる。おそらく解釈性とは何かというと、ある差異を一つの経験物として存在完成させること、意味ってそういうものだと思う。

奥山 僕が聞きたかったのは、今田先生の議論で、慣習的な行為とか合理的な行為とかの時には意味が登場してこなくて、ある時、突如として登場してくる。つまり、ある因果的な実在論的な世界観を、突然解釈するという問題が入ってしまう。

今田 それは、『自己組織性』の前半の変換理性の話を読んでください。リアリティをとらえるためには演繹理性、帰納理性および解釈理性がどう必要か。それらに共通しているのは認識の存在接続だといっている。

宮台 因果的決定論の中では、初期条件を設定すれば帰結にまっすぐいたる。自然科学ではその帰結のルートに認識利得がある。ところが社会科学ではしばしば初期条件つまり原因に過剰な理論負荷が存在する。奥山君が聞いたかったことは、リフレクションという概念もそのメカニズムが明らかでないまま持ち出されると、それに原因としての過剰な負荷がかけられて、結局因果理論、あるいは因果的機能主義というものになりがちではないか、ということではないか。

奥山 もう少し意味一元論でいくべきではないかということを書いたかった。たとえば、サイモンの因果論はタイプ・セオリーに変わって、いわゆる実在的因果論とは違ってきている。

吉田 私は、たとえば形式的にみれば、一般に規則の場合でも初期条件を与えたら帰結がでてくるわけで、そういう意味で、理論の数学的・形式的構造がどうであるかということと因果論かどうかということは、まず分けた方がいいと思う。遺伝情報の仕組みとか生体内化学反応とかいうところは、化学の理論で因果的に説明されている。それに対して、社会の中でルールにしたがってどうのこうのということは、つまり要するに、シンボル性の情報空間にかかわる出来事は、因果的説明に馴染まない。

もう一つ、今日はまだ意味の問題を正面きって論じていないと思う。僕のような議論以外の可能性も出してもらって、意味の意味を分析的に確定する作業が絶対に必要だと思う。単に、意味

の理論を構築するというスローガンだけでは処理できない問題だと思われる。

宮台 因果論から訣別する必要があるかどうかを早急に決めるのは、問題があるが、それは措いておけば、因果論を敵に回すためには意味の概念を形式化しなければならない。ルーマンがそれをやっている。彼は、意味を「地平を開示する機能」と定義した。たとえば、あるものがある時代にある意味をもつということは、後続する時代の一群の可能性領域を開いているということだ。ただしその中で何が実現するかは分からないという点で、進化は偶発的である。これは、非因果的な進化論と言える。

吉田 ルーマンの場合もそうだけれど、意味概念がふつうのものと違う気がする。一番分かりやすいのは「言葉の意味」という用語法ですが、「地平の開示」なんか、別の言葉を使ってほしい。あるいは、一つの側面だけをクローズアップしすぎている。

意味の概念をまったく新しい、従来の自然言語・科学言語で定義されていたのとは異なる意味で定義するというのが、学界全体としての傾向であるとすれば、それはそれで新しい差異化が登場させることになると思っている。私が、情報の概念を著しく拡張したのと同じことだ。だが、そのためにも、意味についての言語分析を一度徹底させてほしい。

理論と対象について

浜 日出夫 今日の吉田先生のお話では、僕からみて今田理論と橋爪理論の一番いいところが触れられていない。お二人の理論はいままで科学観の再検討ということを含んでいて、全体を見る場所というものがもうない、むしろ理論というものが全体の一部として含まれてしまっているということが共通の出発点になっていると思う。それに対してどう対処するかという戦略で二人は異なっているが、橋爪さんは全体について語ることを断念することで、部分についてポジティブに語ろうとされる。今田さんは自分自身を含むような全体についての理論を構想される。そこでリフレクションということが必然的に入ってこざるをえないわけです。

吉田先生は相変わらず全体を見ている。その中に吉田先生は含まれていない。吉田先生のはpositiveな自己組織の理論で今田さんのはreflexiveな自己組織の理論なのだと思う。この点、今田さんが、「プラグマティックに妥協してもいい」といわれると、大変困る。

吉田 僕の議論も、主体や主体性の概念とか自己現象の3層性とか、そうした現象を主題化している。おそらく、浜さんの、私に対する違和感は、同じく当事者視点を採用しながらも、当事者視点タイプの用語法、とりわけ「<当事者=自己>視点タイプの用語法」と、観察者視点タイプの用語法とのズレにあると思う。

浜 そこで、主体性とかいう言葉が使われているけど、全然違うと思う。やはり主体というのは「私」のことだと思う。先生が自己と主体というのは、「私」ではない。

浅野智彦 非常に意外に思ったのは、自己組織を主張する二人の先生がたが、ルール、メタ・ルールというふうに無限遡及する現象を非常に忌避していらっしやるということです。ルールに限らず、無限後退に陥るという現象は論理的に考えると非常にたくさんあるはずで、たとえば個物を同定するという問題を考えてみると、否定の無限連鎖でしか同定しえないはずで、たとえば、「犬」は「猫でない」「・・・でない」という否定の無限連鎖として反照的に同定される

わけですが、この「猫」もまた「・・・でない」という否定の連鎖としてしか同定されえず、結局どの個物にも言及できないはずですが、日常生活ではそうなるはならず、無限遡及とか無限後退はなんの苦もなく処理されている。とすると、これは非常に不思議なことだと思うので、こういうことをこそ自己組織と名前を冠する理論は明晰に扱ってほしい。

宮台 社会学というのは、一部で批判されているように、何を扱っているのが社会学者自身にもよく分からない。何を扱っているのかよく分からないのに、それに対する方法とか倫理を論じても合意形成はなかなか難しい。そうすると、個別の普遍理論にあたる業績を積み重ねていくという作業がどうしても必要になります。その中で、理論の認識利得は何だったのかということが、後から分かってくる。はじめから、因果論に認識利得があるとか意味論に認識利得があるとかというふうに向付けてしまうことには、僕は反対ですね。

大澤 今日、社会システムの自己組織性といったものをどう捉えるかということ、吉田先生の報告をきっかけにしながら、話し合っていました。本日の討論が、十分に噛み合ったものになったかどうか私にはよくわかりませんが、少なくともいろいろな問題の所在だけは照らし出されたように思います。

たとえば、行為の「意味への志向性」をどのように把握するかということが、今回の主題と関係してくるということについては、ある程度の合意があったように思います。もっとも「意味の意味」について明確な像がえられていませんから、真の合意と呼ぶべきかは疑問ですが。

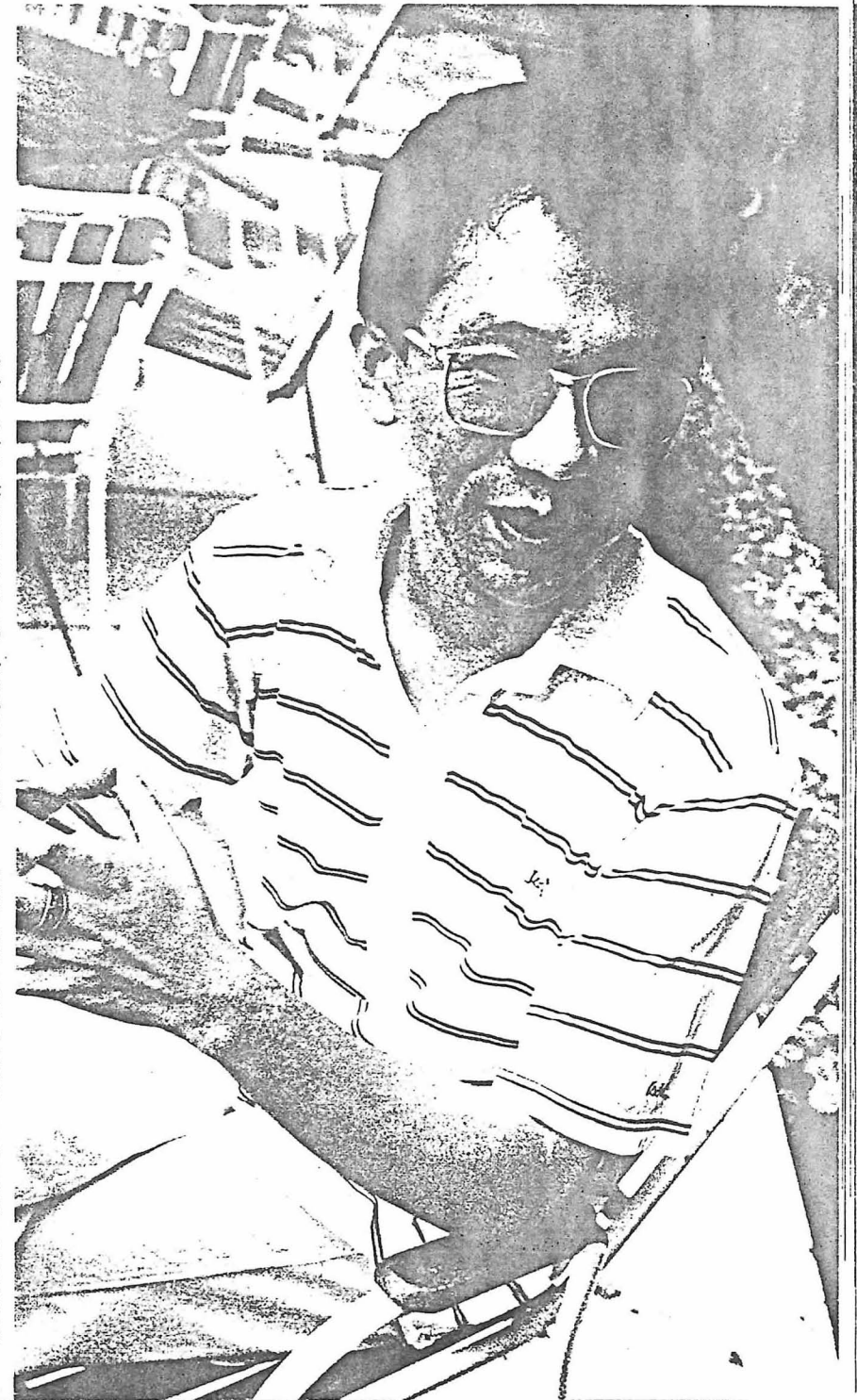
意味の問題は、橋爪さんや吉田先生によって議論された「理解」という現象の位置づけにも関係してきます。橋爪さんが関東社会学会で仰ったのは、理解とは意味へと志向する営みであり、社会現象の認識においては、物理的事実を認識する場合と異なって、私たちは「対象においても理解がなされていること」を理解しなくてはならないということです。ところが橋爪さんによれば、理解という営みは、端的に「それ」として提出することができないので、理解ということを実践においてあらかじめ知っているものには「理解」できない、という循環が生じてしまうのです。

本日奥山さんや浜さんが仰ったことも、このような論脈と無縁ではありません。奥山さんの「意味の一元論」の理論でいくべきだとの提案は、社会内の全ての実践が意味へと志向するものとしてのみ現実性を持つ、ということに関係しています。また橋爪さんのお考えは、社会現象の認識がそのまま観察し理解する主体の自己保持になるような構図を示しています。浜さんが念頭に置かれていた連関もこれに近いのではないのでしょうか。

社会システムの自己組織性の問題や行為の自己言及性の問題は、現代の社会理論の最大の難問の一つであり、たとえばルーマンの理論などでも中核的な関心事となっています。もっともルーマンの場合は、自己言及 (Selbstreferenz) という語は使いますが、自己組織とは言わず自己創出 (autopiesis) という言葉を好みますが。このようなホットな大問題に短時間で結論めいたものを出すなどということは土台無理なことです。

いずれにせよ、最終的な発言というのは永遠にありえません。誰もが、反論を十分にあり得ることを予想して、暫定的に意見をいっているだけなのですね。今日もそういうような議論で、一つの意見にまとまったということではないですけども、それなりに有効であったと思います。

橋爪大三郎 — 現代思想は平易に語れ



わがかりやすく書きたい、この人は思っている。現代思想の世界では珍しい御仁だ。その意気が受けたか、さきごろ上梓した「はじめての構造主義」は好評で、一日に五十冊売れる大学生協も出たほど。浅田彰さんの本は、いわば思想の受験参考書。

授業に出ていないとわかりにくい。でも、知識は本来、生活に役立つべきものでしょ。ヨーロッパの翻訳じゃなく、日本語から発想し、分析していきな。東大卒の四十歳。大学に職を求めず、独自の思考を重ねる注目学者の登場だ。(写真/川島俊昭)